基本情報

試験時間：60 分　満点：100 点　解答方法：番号選択式

出題範囲

「現代の国語」「言語文化」※古文・漢文は除く

難易度

基礎～標準レベル

出題内容

年度	大問	小問	出題内容
2026	一	9 問	出口顯『声と文字の人類学』 漢字の読み問題、空欄補充問題、読解問題
	二	9 問	志賀浩二『数学史入門』 漢字の書き問題、空欄補充問題、脱文挿入問題、語義問題、読解問題

傾向

● 文章問題２題で構成されています。文章の字数は、それぞれ 4,500～5,000 字程度で、合計 10,000 字程度となりました。大問一は、手書きの効用について、ティム・インゴルドの「手書きの擁護」を下敷きに、筆者と関わった女子学生の体験談をまじえつつ整理する文章でした。大問二は、近世ヨーロッパの新しい思想がどのように生まれたかを論じる文章でした。問題形式は、漢字問題、空欄補充問題、脱文挿入問題、語義問題、読解問題で構成されています。以下では、問題ごとに対策を記します。

対策

● 大問一

問一　漢字の読み問題で、傍線部の漢字と同じ読み方をする漢字が含まれる熟語を選ぶ形式でした。2025 年度入試では高等学校で読み方を学習する熟語が出題されましたが、2026 年度はすべて中学校までに習う漢字の読みが問われました。傍線部の漢字と、選択肢として挙げられている漢字とをすべて正しく読むことが求められます。高等学校までに学習するすべての漢字の読み方を覚えておきましょう。

問二　空欄補充問題で、二字の熟語を選ぶ形式でした。空欄補充問題は、文脈を踏まえ、何を補充すれば意味が通るかを考える必要があります。そのため、空欄を含む一文だけでなく、空欄を含む段落、場合によってはさらにその前後の段落まで広く読んだ上で、最も適するものを選ばなければいけません。「何となくこれが当てはまりそう」と感覚で選ばずに、本文中の言葉を根拠に選択肢を選ぶようにしましょう。

問三　読解問題で、傍線部の具体的な説明が問われました。傍線部についての詳しい説明箇所を本文から探し、部分的にでも一致しない選択肢を消去することが正答への近道になります。本文を読むときは、細かい内容を追うだけでなく、段落ごとの内容を大づかみして、どの辺りにどのような事柄が書かれているかをメモしながら読むとよいでしょう。

問四　空欄補充問題で、漢字一字を選ぶ形式でした。本問は空欄に漢字を入れて訓読みの言葉を完成させる問題であったことから、空欄直後の送り仮名が大きな手がかりになりました。問一と同様、高等学校までに学習するすべての漢字の読み方と送り仮名を覚えておくことが重要です。

問五　空欄補充問題で、二文節以上の表現を選ぶ形式でした。問二と同様、空欄を含む文の前後をよく読む必要がありますが、本問では選択肢に含まれる四字熟語の意味を知らないと正答できない問題も出題されました。普段の学習で、本文だけでなく選択肢に含まれる言葉にも、意味がわからないものがないか確認し、あれば必ず辞書で意味を調べる習慣を定着させましょう。

問六　読解問題で、本文の内容理解が問われました。「手書きの効用」は本文全体で述べられているので、該当する箇所に線を引いておくと選択肢と照合しやすくなります。選択肢を検討する際のポイントは、本文と矛盾する言葉や本文に書かれていない内容の有無です。また、本問のように、選択肢の表現が本文とは別の言葉に言いかえられている場合もあります。本文と同じ言葉があるかどうかを表面的に見るのではなく、同じ「内容」が書かれているかどうかを判断できるように、「つまり……である」と自分の言葉で言いかえる練習をしましょう。

問七　読解問題で、本文の内容理解が問われました。問三に記した通り、段落ごとの内容を大づかみしながら読むようにすれば、手書きの手紙の「交換」についての説明が傍線部以前にないことがすぐにわかり、傍線部に関する説明箇所をすばやく発見することができるでしょう。本文を漠然と読むのではなく、どこに何が書いてあるか把握しながら読むことを普段の学習から意識しましょう。

問八　読解問題で、示された注記が本文のどの段落に対するものかを選ぶことが求められました。まずは注記をよく読み、手がかりとなるキーワードを探すことが重要です。たとえば本問では「さらなる思考の短縮化」に着目すれば、本文で「思考の短縮化」に触れている段落が正答になると判断できるでしょう。

問九　読解問題で、本文全体の内容理解が問われました。問題に取りかかる前に設問を確認して、本問のように本文全体の内容を問うものがあるかを確認したり、段落ごとの要点を問題用紙にメモしながら本文を読んだりすることが解答時間の短縮に有効です。

● 大問二

問一　漢字の書き問題で、傍線部の漢字と同じ漢字を用いる熟語を選ぶ形式でした。本問では、同音異字を正確に書き分ける力が求められました。こうした問題に正答するには、漢字の読み、意味、熟語を関連づけて覚える必要があります。意味がわからなかったり書けなかったりする漢字は、その漢字を用いる短文と合わせて覚えると、本問に限らず漢字問題全般の対策となるでしょう。

問二　空欄補充問題で、適切な論理関係を表す言葉を選ぶ形式でした。空欄の前後の語句や文、段落がどのような関係にあるのかを読み取りましょう。また、こうした論理関係を表す言葉は、本文の展開を理解するために重要なものです。設問になっているかどうかにかかわらず、それぞれの言葉がどのようなはたらきをしているのか意識して本文を読むようにしましょう。

問三　読解問題で、傍線部の内容理解が問われました。傍線部を一文全体に延長し、「デカルトの著作が、ヨーロッパ（の人々＝科学者）に示した方向性」が問われていることを確認しましょう。すると、デカルトのみに言及した選択肢は誤りと判断できます。このように、傍線部を、傍線部を含む一文全体に延長してみることは、問われている内容を正確に把握する上で有効です。

問四　空欄補充問題で、二字の熟語を選ぶ形式でした。大問一の問二と同様、文脈を踏まえるために空欄の前後をよく読むことが重要です。また、本問のように同一番号の反復使用不可の問題は、確実にこれしか入らないというものから順に選んでいき、すぐに答えを決められないものがあれば後から考える方が解答時間を効率的に使うことができるでしょう。

問五　脱文挿入問題で、本文中から抜け落ちている一文を入れるのに適した箇所を選ぶ形式でした。こうした問題は、脱文に含まれる言葉を手がかりに考えます。脱文内に指示語や接続詞が含まれている場合には、その指示語が何を指しているのか、前後との論理関係はどうなるのかを考えましょう。本問では「そしてここでは」とあるので「方法が、幾何学の対象を明らかにする」ことを論じている箇所の直後が正答になるということに気づけば、十分に対応できるでしょう。

問六　読解問題で、指示語の内容が問われました。本問は、選択肢にある「演繹的な思索」や「ギリシアへの回帰」に該当する表現が本文にはなく、逆に、傍線部の直前の三行で「自然」を解析することに触れられていることに気づくことが必要でした。このように、大問一の問六同様、本文と同じ「内容」が書かれているかどうかという観点で選択肢を検討しましょう。

問七　語義問題で、「不世出」と「一様」の意味が問われました。語義がわからない言葉を調べることによって語彙を増やすことは重要です。大問一の問五に記した通り、語義に自信がない単語があれば、辞書で意味を確認する習慣を定着させましょう。

問八　読解問題で、引用箇所の内容理解が問われました。まず、引用文が「絶対」と「相対」という対義語を用いて、二種類の時間を対比して述べていることに注目します。次にそれぞれの特徴を整理し、大問一の問六同様、引用文と同じ「内容」が書かれているかどうかという観点で選択肢を検討しましょう。

問九　空欄補充問題で、二文節以上の表現を入れる形式でした。引用文を丁寧に読み、時間に関する三者の立場を整理することが必要です。空欄の前後で、それぞれの立場が説明されている箇所を探し、異同を検討しましょう。